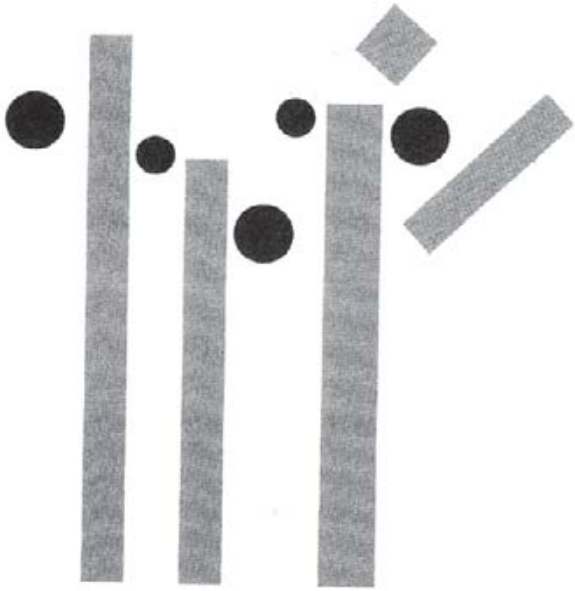
小学生を対象とした国際比較調査から

（抜粋）



今回は日韓の高校生を対象とした比較調査だが、実をいうと、小学生を対象とした国際比較調査はこれまでに3回試みている。そして、本モノグラフ・シリーズの「小学生ナウ」で結果を報告してきた。

1988年に発表した第1回の調査は、ソウル、タイペイ、シアトルを主たる調査地域としている。

考えてみると、それから5年たち、今回調査に協力してくれた高校生は、1988年に中学に入った訳なので、第1回目の小学生調査のサンプルと、学年にして1～2年の開きがあるものの、ほとんど同じ世代に属する。

そこで、高校生調査の背景をもう少し深く理解してもらう目的に、小学生調査の一部を再収録させてもらうことにしたい。

（深谷　昌志）

「モノグラフ・小学生ナウ」Vol. 8－10
（7つの都市の子どもたち）
1989年1月刊　P. 36～52（一部をカットしてある）

第Ⅰ章 子どもの描く未来の自分

子どもとは常に未来を見つめて生きる者たちだろう。そしておとなは現在を見つめ、老人はむしろ過去に目をやって生きようとする存在なのかもしれない。その子どもたちが自分の未来にどんな夢を抱き、どう自己形成しようとしているか。子どもの学習ぶりも、こうした未来像との関わりで解釈し分析してゆく必要があるのではなかろうか。

1. いつまで学校へ行きたいか

まず、子どもたちにどの学校段階まで進学したいかを聞いてみた。**図1**（**表1**）が示すように、大学進学を希望する者の割合は、日本が61.8%と一番低く、アメリカ、タイペイの順に増加し、ソウルは93.3%と最も高くなっている。しかもソウル、タイペイでは自国の大学ではなく外国の大学への留学希望者もかなりの割合にのぼっている。日本の子どもたちで留学を希望する者はわずか12.8%（大学進学希望者のうち）でしかない。

タイペイの場合、香港ほどでないにせよ、中国大陸との関係が微妙で、人びとは将来に不安を抱いている。そうした気持ちが海外の大学へ目を向けさせる背景であろう。また、ソウルでも、一昔前の日本がそうであったように留学の社会的な評価が高く、とくに現在のソウルを動かしている人の中にアメリカで学んだキャリアの持ち主が多い。それにひき

かえ、幸か不幸か、日本では海外の大学で学ぶ必要性が少なくなった。そうしたところから「自国の大学で」が87.2%に達したのであろう。

ソウルの場合は、のちにもう少しくわしい紹介をつけることにしたいが、タイペイについても、学歴がものをいう社会で、大学入試を目指して、かなりきびしい入試競争が展開されている。いわば、そうした競争の影が子どもたちの大学進学熱となって現れている印象を受ける。そして、アメリカでは入学しやすく卒業しにくい制度をとっているので、とりあえずどの子も大学を目指すのであろうか。アメリカの84.8%という数値に明るさを感じるが、それにしても、日本の子の数値の低さはどこからくるものだろうか。

図1　大学進学希望率

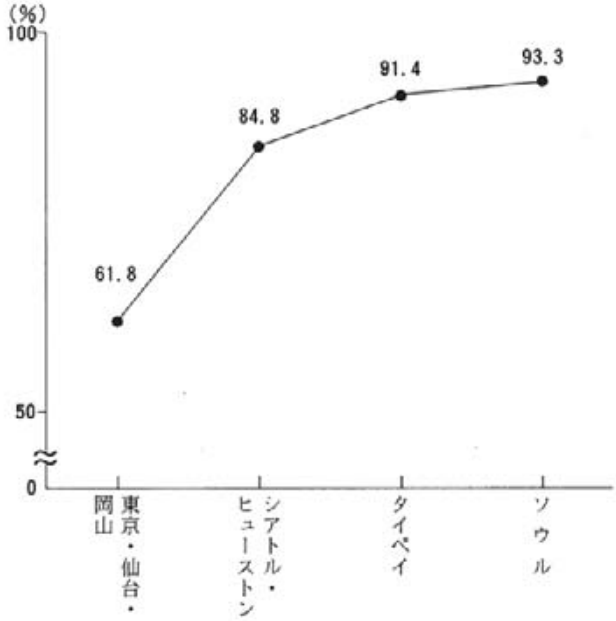


表1　将来の学歴

(%)

	東京・仙台・岡山			ソウル			タイペイ			シアトル・ヒューストン		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
中学まで	3.0	1.5	2.3	1.9	2.4	2.1	1.8	0.9	1.3	5.0	4.4	4.7
高校まで	34.3	37.5	35.9	4.2	5.1	4.6	9.4	5.3	7.3	9.9	11.2	10.5
大学まで	62.7	61.0	61.8	93.9	92.5	93.3	88.8	93.8	91.4	85.1	84.4	84.8*
自分の国で	87.1	87.2	87.2	56.5	51.1	54.0	39.5	37.0	38.2	94.6	92.2	93.4
外国で	12.9	12.8	12.8	43.5	48.9	46.0	60.5	63.0	61.8	5.4	7.8	6.6

＊短大を含む

2. つきたい職業

さて、子どもたちはどんな職業につきたがっているか。**表2**では、子どもたちがなりたがっている職業を上位4つまで選び出してみた。

まず目をひくのは、国を問わず子どもに人気のある職業が見うけられる点で、男子の「プロスポーツ選手、大会社の社長」、女子の「小学校の先生、デザイナー」がそれに当たる。つまりお国柄を反映するのは残りの2つの職業ということになる。この残り2つに目をやると、**表3**のようになる。

一口に言って日本の子どもたちのアスピレーションの低さは、どうしてなのだろう。というよりも、日本では、他国の子どもの間に出てきている専門的職業、たとえば「医者、法律家、芸術家、科学者」や「国会議員」の

表2　つきたい仕事（4位まで）

(%)

	東京・仙台・岡山	ソウル	タイペイ	シアトル・ヒューストン
男子	プロスポーツ選手 47.1	科学者 56.8	大会社の社長 53.2	プロスポーツ選手 39.4
	大会社の社長 30.0	プロスポーツ選手 43.4	プロスポーツ選手 44.5	法律家 33.3
	マンガ家 22.0	大会社の社長 40.7	マンガ家 42.8	芸術家 26.9
	タレント 18.7	国会議員 38.9	医者 42.5	大会社の社長 25.1
女子	小学校の先生 49.1	小学校の先生 52.3	小学校の先生 61.3	美容師 43.2
	デザイナー 26.1	芸術家 39.9	芸術家 47.8	デザイナー 32.1
	看護婦 24.5	デザイナー 36.1	タレント 43.6	小学校の先生 30.0
	タレント 24.1	医者 35.9	デザイナー 43.1	芸術家 28.7
全体	プロスポーツ選手 29.7	科学者 41.0	芸術家 42.5	法律家 34.8
	小学校の先生 29.5	医者 34.3	大会社の社長 41.7	芸術家 28.1
	タレント 21.4	大会社の社長 32.4	タレント 36.5	プロスポーツ選手 27.0
	自分の店を経営 20.3	プロスポーツ選手 32.4	小学校の先生 36.3	医者 24.1

ような職業が、なぜ目指されないのだろう。むろんマンガ家やタレント志望が悪いというのではない。それらは子どもらしい夢として、ある割合で子どもたちの間にあっていい。しかし男子女子共に、他国には出てきている「なるのがむずかしいが社会的に尊敬される」職業がまったく上位に顔を出していないのは、なさけない気がする。これは日本では、おとなたちの間にも他国より専門的職業に対する社会的評価が低いことの現れかもしれない。大金持ち（会社社長）とスター（スポーツ選手、マンガ家、タレントを含めて）という華やかなイメージの職業だけに目を奪われて暮らしているのが、われわれ日本の社会の現状なのだろうか。

なお、**表4**から**表6**に学業成績と未来像との関係を示すデータを示してみた。日本の場合、「勉強が好き」と答えている子が大学進学を考えている。それに対しタイペイやアメリカでは、勉強の好き嫌いと進学との関係はシャープでない。子どもの頃の成績と進学とは関係がないという感覚が、子どもたちの間に定着しているのであろうか。

また、**表5**の結果でも、タレントやマンガ家を除くと、日本の子どもは成績がよくないとしかるべき仕事につけないと思っている。アメリカやソウルでも、大学教授や社長についてそうした傾向が認められるが、全体としてみると、学業成績の良し悪しによって未来を決める感じが、日本ほど強くはない（表6）。

日本の子どもたちは、学業成績が将来を規定すると信じており、そうした影響がよい成績をとれない＝未来に対する見通しの暗さ＝やる気のなさとなるのであろうか。

表3　つきたい仕事（国による差）

	男　子	女　子
日　本	マンガ家・タレント	看護婦・タレント
ソウル	科学者・国会議員	芸術家・医者
タイペイ	マンガ家・医者	芸術家・タレント
アメリカ	法律家・芸術家	美容師・芸術家

表4　算数の好き嫌い × 将来の進路

(%)

		とても好き	わりと好き	あまり好きではない	とても嫌い
東京 仙台 岡山	中学	9.0	25.4	29.9	35.7
	高校	11.9	31.9	34.3	21.9
	大学	25.3	34.4	26.1	14.2
ソウル	中学	(28.6	35.7	21.4	14.3)*
	高校	(19.4	21.0	35.4	24.2)*
	大学	34.6	34.6	19.0	11.8
タイペイ	中学	(20.5	15.9	50.0	13.6)*
	高校	(17.7	32.1	36.9	13.3)*
	大学	24.9	30.7	31.5	12.9
シアトル ヒューストン	高校	(39.5	10.5	13.2	36.8)*
	短大	40.1	20.6	17.8	21.5
	大学	44.0	27.9	12.3	15.8

＊サンプル数が少ないため（　）を付した

表5　つきたい仕事 × 成績

(%)

成績	東京・仙台・岡山			ソウル			タイペイ			シアトル・ヒューストン		
	上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位
大学教授	11.4	5.0	5.8	35.0	28.4	24.2	37.9	30.5	25.2	8.3	6.6	4.7
大会社の社長	24.4	15.5	18.3	33.9	33.0	28.0	46.9	37.4	25.2	27.6	20.9	15.1
医　者	19.2	8.4	6.4	40.1	34.4	26.2	37.2	33.0	37.8	26.3	26.4	17.9
小学校の先生	31.6	31.1	24.9	31.6	33.0	27.9	33.1	36.6	35.9	21.9	17.0	17.0
芸術家	25.6	12.8	10.8	24.6	25.1	23.0	19.3	28.1	29.0	29.4	28.4	28.3
タレント	21.2	21.2	22.2	22.6	27.0	28.7	18.9	7.9	10.1	15.8	12.3	13.7
マンガ家	19.7	17.6	22.8	13.8	18.0	18.9	25.5	19.7	15.1	11.0	11.4	11.3

◯は最大値

表6　つきたい仕事 × 成績

(%)

成績	東京・仙台・岡山			ソウル			タイペイ			シアトル・ヒューストン		
	上位A	下位B	B／A	上位A	下位B	B／A	上位A	下位B	B／A	上位A	下位B	B／A
大学教授	11.4	5.8	50.9	35.0	24.2	69.1	37.9	25.2	66.5	8.3	4.7	56.6
大会社の社長	24.4	18.3	75.0	33.9	28.0	82.6	46.9	25.2	53.7	27.6	15.1	54.7
医　者	19.2	6.4	33.3	40.1	26.2	65.3	37.2	37.8	101.6	26.3	17.9	68.1

3. ソウルの受験勉強

こうした学習意欲の問題については、その社会の学歴構造が影響を及ぼすと考えられる。したがって、数値の背景を理解するには広い視野が必要となる。

ここではそうした一例として、アメリカの場合はかなり知られているので、ソウルの受験事情を紹介することにしたい。なお、タイペイは「ドクソシル」（読書室）はないにせよ、「補習班」が林立し、夜中まで高校生が予備校通いをしている。

学習塾禁止令

プレテストを兼ねて、ソウルへ出発する前にいくつかたしかめてみたいことがあったが、そのひとつは、学習塾禁止令が韓国の教育にどういう結果をもたらしたかを見聞することであった。

周知のように、韓国では1980年に大統領令を発して、家庭教師や学習塾を禁止する政策を実施している。その当時に試みられた改革の概要は、以下の通りである。

(1) 中学（現在は義務制でない）と高校への入学は、小学区制をとり、コンピュータを使って総合選抜をする。その際、私立学校も特例を認めず、小学区の中に位置づける。

(2) 大学進学状況を緩和するため、卒業定員をそのままにして入学定員を2倍とする（当然、アメリカ型の卒業しにくい大学へ、大学の性格が変わってこよう）。

(3) 浪人を除き、児童および生徒が家庭教師についたり、塾通いをするのを禁止する。それに違反した家庭や教師、学生は処分の対象とする。なお、ピアノやそろばんなどのけいこごとは、学校長の許可を得て通うこととする。

前回、ソウルを訪ねた1982年は、こうした改革が試みられた直後で、学習塾で教えていた大学教授が逮捕され、親に罰金が課せられたなどのニュースが流れていた。

ソウル大学へ行き、何人かの大学生に、学習塾や予備校の話を聞いてみた。中学生時代はむろんのこと、高校へ入っても、毎日夜の11時すぎまで予備校へ通ったという。朝早く、昼と夜の弁当を持って登校する。学校が4時まであるので、教室の片隅で夕食をとり、5時から予備校へ行く。英語と数学を中心に、さらに5～6時間の補習がつづく。夜の12時から外出禁止令が出されているので、帰りはかけ足で帰宅を急いだという。

しかも、近年では受験勉強を始める年齢が低下し、ソウルあたりでは小学校高学年生の半数以上が家庭教師につく状況になった。もっとも、月謝が高いので、数人でグループを作り、どこかの家へ来てもらうかたちが多かったらしい。

そうした教育過熱状況に手を焼いた政府が学習塾や予備校（浪人生を除く）を禁止する処置に出たのはすでに述べた通りだが、その当時でも、筆者の訪ねた私立高校では、学習塾の代わりに、朝の6時から校内放送を通して、英語や数学の補習を行っていた。つまりよい大学へ入りたいと生徒が望み勉強をしているのだから、学校としてもできるだけ手を貸さなければならない。とくに、学習塾や予備校が禁止されたので、学校は生徒の進学指導にすべての責任を負うかたちになる。そうなると、補習の復活もやむを得ないのかと思った。

明け方まで受験勉強

もっとも、前回ソウルを訪ねたときに手に入れた資料によると、1978年度の統計資料では、中学卒の平均賃金は47,000ウオンというから、日本円に換算すると、16,000円程度の

月収となる。高卒でも、73,000ウオン（24,000円）程度の収入にすぎない。といっても、家庭電化製品などの値段は日本と変わらないので、生活は決して楽ではない。しかし、大学卒の平均賃金は16万8,000ウオン（56,000円）に達し、職種によってもう少し高い賃金を望めるという。

学歴間の賃金格差が大きく、「大学卒」というレッテルがものをいう社会である。中でもソウル大学出身者は、ハーバードやケンブリッジ以上の値打ちを持つという。となれば大学進学熱が高まるのは当然である。なにしろ、学歴は賃金だけでなく、社会的な尊敬、結婚、家庭生活にも影響が及んでくる。加えて、韓国では徴兵制がとられているので、20歳までに大学へ入っていないと進学が困難になる。そのためなんとか現役で志望大学へ入ろうとする気運が強まってくる。つまり、一浪しか許されていない社会である。そうした背景があるだけに、学習塾を禁止するだけでは問題解決にはならないのではと思っていた。

そして、韓国へ行った友人たちの話を聞くと、ソウルでは学習塾が禁止された代わりに自習室が盛んになった。ビルの一室にいくつもの机があり、そこに陣どって生徒たちが勉強しているという。といっても、どの友人もそうした話を聞いているだけで、実際に見た人はいない。それだけに、ソウルへ行ったら自習室をぜひ見てみたいと思った。

ソウルで話を聞いてみると、自習室というのは日本流の言い方で、現地ではドクソシル（「読書室」あるいは「図書室」）というらしい。そして、ターミナルへ行かなくとも、町中にいくつものドクソシルがあるとのことであった。

とりあえず外側を見ることとしたが、ビルの2階や小さな建物にドクソシルがある。日本でいえば、さしずめ学習塾という感じで、大規模で企業的な感じのところがあるかと思うと、小さな家内工業的な設備もある。

そして、ドクソシルを利用しているのは、原則として高校生で、生徒たちは当然のことながら、昼間は学校へ通っている。しかも放課後、教室や図書室で自習するかたちが定着しているので、生徒たちは夜の7時近くまで在校している。それならばドクソシルなど不要ではないかと思う。しかし生徒たちは、7時すぎにドクソシルへ入り、夜中の1時、そして2時まで勉強をする。生徒によっては、ちょっと仮眠した後、明け方まで受験勉強をして、そのまま学校へ出かけるという。そして、そうしたドクソシルから通学する生徒は決して少数例ではないらしい。

外側から見ているだけでは状況がわからないので、ドクソシルの内部を見せてもらうことにした。案内してくれたのは、中流の下位の感じのところだったが、フロアーがベニアで区切られている。開けてみると、畳2枚くらいのスペースに机と椅子があり、マットレスもあるので、仮眠くらいはできる。その他に共有のシャワーがあり、学生版カプセルホテルといえば、ドクソシルの感じをつかめると思う。

もっとも、生徒たちが受験勉強をしているところなので、雰囲気は暗い。それに換気などを考えずに間仕切りがしてあるから、かつての万年床の敷かれた学生下宿のようなにおいもして、快適な環境とはいいがたい。

もっとも、これは中流の下だから、こうした雰囲気になるので、ソウルの中心街にあるドクソシルはスペースが広く、シャワーも高級、そして、イヤホーンで音楽を聴けたりする設備も、備えているらしい。そうなると、50,000ウオンというから、月額10,000円弱の出費を、覚悟しなければならない。中流の下のドクソシルでも、30,000ウオン前後、ほぼ6,000円の負担で、月収が日本の半額程度の事情を考えると、どう考えても安いものとはいいがたい。

大学入試テストを目指して

高校生たちが夜遅くまで勉強した後、自習室に籠もって明け方まで受験勉強に取り組む。

ソウル滞在中に知り合いになった何人かに

ドクソシルについての考えを尋ねてみた。受験期間は、せいぜい1～2年にすぎない。あとで後悔しないように、全力をあげて勉強すればよい。家にいると、どうしても緊張感に欠ける。だから受験仲間のいるドクソシルで勉強したほうがよい。自分も若い頃にドクソシルを使ったが、青春の思い出の1ページとして、ああいう体験もあってもよいのではないか。

予想外なほどに、ドクソシルについて批判する声が聞こえてこない。新聞やテレビにもドクソシルをストレートに批判する動きは、認められないという。

そうした意味では、学習塾の禁止がドクソシルという学習施設を生みだしたともいえなくもない。

韓国では11月20日頃に、日本の共通一次に相当する大学入試のための共通テストが実施される。日本の場合と異なり私立大学も参加しているので、このテストで何点を取れるかで、どの大学へ入れるかが決まる。それだけに受験生は、このテストを目指して勉強することになるが、現在のところ、国語、数学、歴史、外国語、政治経済など、16科目340点満点のテストで、12月末にテストの結果が発表になる。そうした結果をふまえて、1月中旬に志望大学に、学科の希望を3つまで書いて資料を提出する。

もちろん、生徒たちはなんとか合格したいので、自信のある生徒を除くと、競争率の低い学科を選びがちになる。その結果、本人の志望と関係のない学科へ入学することが少なくないらしい。また、16科目のテストはあまりに教科の数が多いというので、来年度から科目をへらすことになりそうだとも聞いた。さらに、合格決定にあたって当該大学で実施する論文や面接の比重を増し、共通テストの結果だけで合否が決まらないようにしたいと語っている教授の声もあった。

したがってこれから先、大学入試テストの改善が進むのであろうが、それにしてもドクソシルそのものは、当分の間なくならないように思う。

いくつかの資料から試算すると、現在、高卒の初任給は13～14万ウオン（約26,000～28,000円）程度だが、大学卒は30万ウオン（60,000円）となり、大学卒の収入は高卒の2倍を超える。そのうえ、ロッテや大宇、現代などの一流企業は、ソウル、高麗、延世などの一流大学からエリート社員を採用するので、社会的な達成を望む生徒は、なんとしてもよい点数を取って、トップの大学へ入りたいと願う。そうした土台が残っているのであるから、ドクソシルという形態はなくなりにくいのであろうが、それにしても明け方まで小さなスペースに籠もり、勉強している生徒の心身共の健康が気がかりとなった。といっても日本の子どもたちも、小学校のうちから学習塾通いをしている。そう考えると、韓国のドクソシルを批判する権利は、日本人にはないように思った。

いずれにせよ、こうした高校生活を見て、ソウルの子どもたちは少しでも早く受験勉強を始めようと、小学校高学年のうちから家庭学習を始めている。

第Ⅱ章 子どもの幸福感をめぐって

子どもたちの勉強ぶりと、その背景でもあるひとりひとりの子が描いている自分の「進路」は、国によってかなりの違いがあることがわかってきた。こうした状況をふまえて、それぞれの都市の子どもたちのしあわせ感を見てみることにしよう。どこに住む子どもたちが最もしあわせなのだろう。

1. 起床から就寝まで

まず**表7**は、1日のどの時間が子どもにとって楽しいかを表の下部に示した尺度でたずね、「とても楽しい」と答えた者の割合を示したものである。表中の数字は1位から5位までを示したものだが、1日のうちで子どもが楽しいと思う時間帯はどこでもよく似ていて、「友だちと遊んでいるとき」や、「体育」など体を動かしているとき、逆に「眠っている間」であることがわかる。また項目によっては、他の都市をひき離して楽しいと反応されている時間があるが、これを拾ってみると、

日本	○昼休みや放課後友人と遊ぶとき
	○テレビを見ているとき
ソウル	○算数や体育の時間
	○昼休み友人と遊ぶとき
	○マンガを読んでいるとき
	○両親とのおしゃべり
	○夜ふとんに入るとき、眠っている間
タイペイ	○夜ふとんに入るとき
アメリカ	○テレビを見ているとき

となって、とくにソウルの子どもたちの反応が面白い。算数の時間を好む子は24.0%と、たとえば日本の子どもの11.2%の2倍以上であり、前章に見たソウルの子どもたちの勉強好き（？）が、はからずも現れている。したがって「昼休み」「マンガ」「眠っているとき」に対する強い反応も、その猛勉強の陰のように思われる。また唯一「両親とのおしゃべり」が好まれているのも、家族のきずなの堅固さを思わせるものがある。

反対に子どもにとって灰色なのは、朝の時間と「勉強」である。これは国を問わずほぼ共通の傾向である。

表7　1日の楽しさ

(%)

	東京・仙台・岡山	ソウル	タイペイ	シアトル・ヒューストン
朝、目がさめたとき（ふとんの中で）	5.1	9.6	11.1	8.5
朝食のとき	8.0	14.6	11.3	15.8
朝、授業の始まる前	10.3	15.4	10.1	10.3
算数の時間	11.2	24.0	14.4	17.7
体育の時間	③50.6	①60.4	①55.4	④42.6
学校で給食を食べているとき	⑤32.6	37.2	22.3	⑤41.4
昼休み、友だちと遊んでいるとき	②60.4	②58.4	⑤34.0	③48.4
家に帰ってから、友だちと遊ぶとき	①65.5	⑤55.0	28.0	①52.8
家でマンガを読んでいるとき	32.5	42.6	24.2	13.6
夕食のとき	22.1	30.3	30.0	26.8
夕食後、お父さんやお母さんと話をしているとき	24.2	④55.3	④36.3	18.6
夕食後、テレビを見ているとき	④40.1	33.0	26.5	37.5
宿題や勉強をしているとき	3.3	9.0	10.1	7.0
夜ふとんの中に入ったとき	20.0	48.9	③44.5	24.1
夜眠っているとき	23.8	③57.0	②44.6	②50.4

○は順位

とても楽しい ① (%) — かなり楽しい 2 — 少し楽しい 3 — ふつう 4 — あまり楽しくない 5 — ぜんぜん楽しくない 6

2. 食事のとき空腹か

表8は、朝食と夕食のテーブルに、子どもたちがおなかをペコペコにして座るかどうかを見たものだ。この項目はすでに日本の調査で、子どもの幸福感や、子どもがよい生活環境の中に置かれていて、遊びを中心とした子どもらしい暮らしがあるかどうかと深く関わっていることを見いだしてきた。

まず朝食のテーブルに「いつも」空腹で座る子は、日本で10.2%、ソウル6.7%、タイペイ12.5%、アメリカ22.9%と、日本の数値はソウルと共に低い。アメリカの子の活力に比べて日本の子どもたちは、やや不健康な状態ではないか。

次に夕食の数値を見ると、ここでも日本の子はいつも空腹な子が16.2%、ソウル11.7%、タイペイ32.9%、アメリカ40.0%と、またソウルと共に日本の子どもたちの食欲不振ぶりが気になってくる。ちなみに「いつも・わりと」空腹を合わせてみても、日本の子は51.2%と半分くらい、アメリカの子は77.9%と元気である。夜ふかし、テレビ、勉強のしすぎ、遊び時間の不足、過剰な栄養などその原因はいくつも考えられるが、とにかく日本の子どもたちが、ソウルと共に他国に比べ健康な生活を送っていないことは確かだろう。なお**表9**に示したように、どの都市も男子のほうが食欲は旺盛である。

表8　食事のとき空腹か

(%)

	東京・仙台・岡山	ソウル	タイペイ	シアトル・ヒューストン
朝食				
いつも空腹	10.2	6.7	12.5	22.9
わりと空腹	33.6	22.9	16.7	36.6
あまり空腹でない	50.3	53.6	61.2	28.9
ぜんぜん空腹でない	5.9	16.8	9.6	11.6
夕食				
いつも空腹	16.2	11.7	32.9	40.0
わりと空腹	35.0	33.9	24.0	37.9
あまり空腹でない	40.9	41.3	38.2	16.0
ぜんぜん空腹でない	7.9	13.1	4.9	6.1

表9　朝は空腹か × 性差

(%)

		東京・仙台・岡山	ソウル	タイペイ	シアトル・ヒューストン
男子	空腹　いつも	13.3	8.1	14.0	26.8
	わりと	35.8	24.2	18.4	35.4
	小計	49.1	32.3	32.4	62.2
女子	空腹　いつも	7.1	4.8	11.0	19.1
	わりと	31.3	21.3	14.7	37.4
	小計	38.4	26.1	25.7	56.5

3. 灰色の気分

時として人はふしあわせ感にとらわれることがある。専門家はそれを抑うつ状態と表現し、素人はそれに「おちこむ」という言葉を使おうとするが、いずれにせよ、ハッピイでない状態には違いない。**表10**は子どもたちの中にあるこうしたグルーミーな気分を見ようとしたものだ。表が示すように、6つの項目（アメリカは親のことをたずねる項目を削除してほしいと要請があり5項目）のうちアメリカの子の反応は、実に3項目で最大値が示されている。

中でも群を抜いて大きい値は「学校へ行きたくない」で、肯定率は48.2%にも達している。友だちから嫌われているとは思わないが「先生がかわいがってくれない（20.3%）」「毎日がつまらない（26.3%）」という反応は、痛ましい感じがする。他の国での特徴は、タイペイの子どもたちのゆったりしたしあわせ気分と、日本の子どもたちでは「毎日がつまらない」と思っている子が最小（9.0%）な点が目につく。

また**表11**は、こうした抑うつ状態と成績との関連を見たものだ。どの国の子どもたちも成績とこうした気分の有無は、大きな関連をもっている。ソウルのように成績が悪くなるほど抑うつ気分が増加する場合もあるが、多くは「上位」と「中位」では差がないが、「下位」のグループが一挙に抑うつ気分を色濃くしているのが特徴だ。

表10　灰色の気分

（%）

	東京・仙台・岡山	ソウル	タイペイ	シアトル・ヒューストン
朝、学校へ行きたくない	17.3	17.8	9.2	48.2
友だちから嫌われている	11.0	12.8	8.6	11.3
先生がかわいがってくれない	13.4	14.7	7.2	20.3
親がかわいがってくれない	6.9	9.3	6.3	*
毎日がつまらない	9.0	12.1	17.8	26.3
私は運がわるい	22.5	16.8	20.1	16.5

＊アメリカ側の要請により削除

いつも そう思う　わりと そう思う　たまに そう思う　あまり そう思わない　まったく そう思わない

①――②――3――4――5

（%）

表11　灰色の気分 × 成績

（%）

成績	東京・仙台・岡山			ソウル			タイペイ			シアトル・ヒューストン		
	上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位
朝、学校へ行きたくない	3.7	5.5	12.5	4.6	7.4	11.8	3.0	5.5	13.5	19.7	29.6	36.1
友だちから嫌われている	5.0	3.0	7.0	2.3	4.5	9.0	3.5	3.4	5.6	2.6	4.2	6.3
先生がかわいがってくれない	7.4	6.1	12.2	3.2	3.2	9.5	3.0	2.5	5.6	9.3	11.9	15.0
親がかわいがってくれない	2.6	2.4	5.7	1.4	4.1	8.3	2.5	2.2	5.6	－	－	－
毎日がつまらない	4.2	3.9	6.5	3.7	6.4	7.1	9.0	9.0	18.0	13.7	13.2	19.4
私は運がわるい	10.5	10.2	16.3	4.0	6.6	12.4	10.9	12.2	23.6	8.8	6.3	8.7
平均	5.6	5.2	10.0	3.2	5.4	9.7	5.3	5.8	12.0	(10.8	13.0	17.1)*

＊5項目の平均

4. 子どもたちのしあわせ感

前に見てきた灰色気分の有無も、いわばしあわせ感に接近してみるためのものであったが、次にもっと直接、子どもたちにしあわせ感の強さを聞いてみた（**表12**中のアメリカの数値は、尺度が異なるので、必ずしも直接の比較はできないと思われる）。

表の示すように「とても・かなり」しあわせな子は

日　本	57.7%
ソウル	76.6%
タイペイ	80.3%

と、日本の子は他のアジアの都市よりしあわせ感が低い点が何とも気になってくる。残念

表12　しあわせ感

（%）

		しあわせ			ふつうくらい	ふしあわせ		
		とても	かなり	やや		やや	かなり	とても
男子	東京・仙台・岡山	36.0	16.8	14.0	24.9	3.3	1.7	3.3
	ソウル	53.4	20.6	11.1	9.0	2.7	1.0	2.2
	タイペイ	54.1	22.1	9.1	12.9	1.2	0.0	0.6
	シアトル・ヒューストン	(25.5	34.6)		26.8	(6.3	6.8)	
女子	東京・仙台・岡山	44.5	18.0	11.9	19.4	3.4	0.8	2.0
	ソウル	62.7	17.1	8.2	8.6	2.3	0.0	1.1
	タイペイ	58.1	26.2	5.2	7.0	1.7	0.9	0.9
	シアトル・ヒューストン	(33.8	34.8)		24.1	(2.8	4.5)	
全体	東京・仙台・岡山	40.3	17.4	12.9	22.1	3.3	1.3	2.7
	ソウル	57.6	19.0	9.8	8.8	2.5	0.6	1.7
	タイペイ	56.2	24.1	7.2	9.9	1.5	0.4	0.7
	シアトル・ヒューストン	(29.6	35.0)		25.3	(4.5	5.6)	

注）アメリカのみ尺度が異なる
I　am（A）very　happy（B）happy（C）somewhat　happy（D）unhappy　（E）very　unhappy

ながらアメリカの尺度は5段階尺度（アメリカ側の要請で）であるため直接の比較はできないものの、「ふしあわせ」と言っている子の割合は

日　本	7.3%
ソウル	4.8%
タイペイ	2.6%
アメリカ	10.1%

となり、アメリカの子が一番ふしあわせ感が強いように推測される。子どもらしい生活とは裏はらに、家庭生活の荒廃（一部にせよ）が、このふしあわせ感を生み出しているのではなかろうか。

また**表13**は、しあわせ感を子どもの成績と進路別に見たものである。日本とソウル、タイペイではいずれも成績のよい子ほどしあわせ感が強く、大学進学を希望する子は、高校までの子よりしあわせ感が強いことが見いだされる。しかしアメリカの子はどの成績段階の子も、どのような進路を希望している子もしあわせ感にほとんど差がないのが特徴だ。人生とは、本当はそうでなければならないと思われる。

表13　しあわせ感と成績・進路（「とても・かなりしあわせ」の割合）

（%）

		東京・仙台・岡山	ソウル	タイペイ	シアトル・*ヒューストン
成績	上位	66.6	84.2	90.2	69.0
	中位	60.0	76.2	87.5	64.0
	下位	47.3	66.6	73.0	61.4
進路	大学	62.3	77.6	81.6	64.5
	高校	50.4	63.7	69.4	58.1
	中学	40.3	62.9	44.4	63.2

*very happyのみ

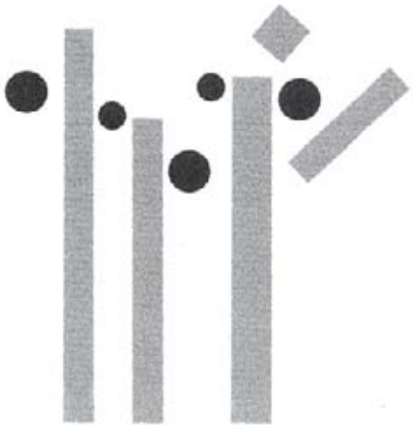
〔特 別 寄 稿〕

日韓の子どもと若者の間に新たな“공감대（共感帯）”の創造を

静岡大学助教授
馬居政幸

星空に下校する韓国の高校生

慶熙ホテル経営専門大学・韓国外国語大学講師
夫　伯



日韓の子どもと若者の間に
新たな“공감대（共感帯）”の創造を

静岡大学助教授
馬居政幸

1．韓国の学校を訪ね続けて

韓国は、周知のように1980年代に「漢江の奇跡」と呼ばれる経済の高度成長を達成し、ソウルオリンピックという国家イベントを見事に成功させ、ニーズ（NIES）諸国の優等生として国際社会に踊り出た。その後、東西冷戦構造の解体という世界史的変動の中で、現在は急激な産業化に伴う社会の構造変動の真っ只中にある。

私は、この韓国社会の現状、とりわけ、学校や家庭や地域社会における子どもの教育の現状を自分の身体で感得することを目的に、1986年1月4日に初めて訪れて以来、韓国への旅を繰り返してきた。そして、小学校や中学校の授業に参加し、小学生、中学生、高校生、大学生と対話を重ねてきた。その過程で構造的には類似した韓国の教育システムにおいて、日本とは異なる子どもや若者の“学びと育ちの現場”を認識することができた。

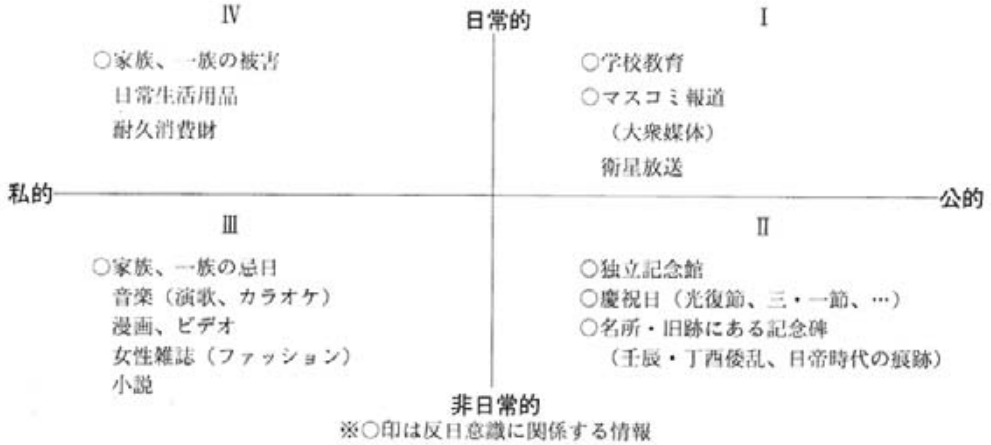
なかでも、小・中・高いずれの教室でも、教壇に立った私に対して、明確に自分の意思を持って質問し反論してくれたことに、驚きと感動を禁じえなかった。日本の教室において、小、中、高と学年と学校が上がるにしたがい意見を述べなくなる授業風景に見なれていたからである。あるいは、先生方が表情豊かに語りかける授業から、日本が韓国に学ぶべき教育のあり方を見出すことができた。1)

しかし、その一方で、日本と韓国の相互理解を進める上で解決しなければならない“現状”についても認識せざるをえなかった。

図1は、私が韓国での生活と資料収集やインタビュー調査により得た韓国における日本に関する文化・情報を、「公的－私的」、「日常的－非日常的」という二つの軸で分類したものである。図2は、同様の視点から日本における韓国に関する文化・情報を分類したものである。両国の情報の量と性格の差異に注目していただきたい。

「日本と韓国における相互の国に関する文化・情報の性格の差異」

図1　「韓国⇨日本」



※○印は反日意識に関係する情報

図2　「日本⇨韓国」

2．両国の相互認識に関する情報の差異

認識し解決すべき第一の課題は、図1が示すように、Ⅰ～Ⅳの全ての領域に“反日意識”に関する情報が存在するという“現状”である。それは、日本の加害性という“歴史的事実の重み”を基盤に、小学校から中学・高校へと成長するにしたがって、次の①～⑤のような社会過程が総合されることにより、戦後（解放後）40数年を経てもなお、“反日意識”は韓国の子どもや若者の間により強く育成されている、という“現状”である。

①日常的に学校教育を通じて教えられる公的な事実（Ⅰ）

②日常的にテレビ・新聞等の情報環境による公的な再確認（Ⅰ）

③日常の人間関係や生活習慣に刻まれた私的な事実（Ⅳ）

④慶祝日や名所・旧跡の碑文・あるいは家族や一族の命日などで繰り返し確認される非日常的で聖的な価値に基づく公的か

つ私的な正当化（Ⅱ、Ⅲ）

⑤このような韓国の現状を無視する（理解できない）としか韓国の人達にとらえられない日本の側の対応と、その事実を増幅する報道（Ⅰ）

第二は、このような社会過程とは別に、生活用品や耐久消費財など“日常生活に使用するモノ”（Ⅳ）の中に、あるいはカラオケ、ファッション、漫画、アニメなどの“遊びの世界”（Ⅲ）に、“日本の現代文化”が実質的に浸透しているという“現状”である。

第三は、このように日常的・非日常的に育成される反日意識と、顕在的・潜在的に浸透する日本文化の狭間に生じる溝を埋めるために、日本の“現状”とりわけ同世代の“現状”の情報への欲求が非常に強いという、韓国の子どもや若者の意識の“現状”である。

第四は、このような韓国の子どもや若者の“現状”を韓国教育関係者が必ずしも正確に捉えておらず、その“欲求に応じた適切な答え”を用意するにはいたっていないと思わざるをえない、という“現状”である。

さらに、上記の四つの“現状認識”を踏まえ、第五として、次の認識を持つようになった。それは、一方でこのような子どもや若者の欲求を生み出す原因であるとともに、他方でその欲求に対する実質的な“応え”と“答え”となっているのが、日本の漫画のハングル訳や日本の漫画に学んだ韓国の漫画文化ではないか、という“現状認識”である。

3．韓国の漫画文化関係者へのインタビュー調査から

私は昨年（1992年）の4月、6月、8月、12月の四度にわたり、韓国全体で数十万部発行されている漫画雑誌の編集責任者の方達をはじめ、韓国漫画文化に関係する人達にインタビュー調査を試みた。特に、日本の漫画が同時進行的に翻訳され出版される現状についての評価とその編集過程について、あるいは広く韓国漫画文化と日本とのかかわりについて質問した。そしてその結果を次の三つの傾向にまとめることができた。

①日本の漫画は韓国の子どもに有害であり文化侵略でもある

②過渡的なものとして日本の漫画を受け入れるが本意ではない

③韓国の漫画文化を豊かにするために日本の漫画を積極的に取り入れる

残念ながら、①から③の順序はインタビューで得た意見の多さの順序でもある。ここでも日本への厳しい認識を確認せざるをえなかった。ただし、韓国で出版されている日本の漫画の多くはライセンスを得ていない海賊版であることも指摘しておかねばならない。

私の日本での取材では、韓国の出版社が正式に契約している日本の出版社は講談社、集英社、小学館、秋田書店の4社のみである。それも4雑誌13タイトルに限定されている。また、海賊版の中には、子どもではなく青年層を対象とした日本の漫画も多い。そのため、特に①のような指摘に対して、日本の出版社は、いわれのない非難、としか答えることができないのが実情である。

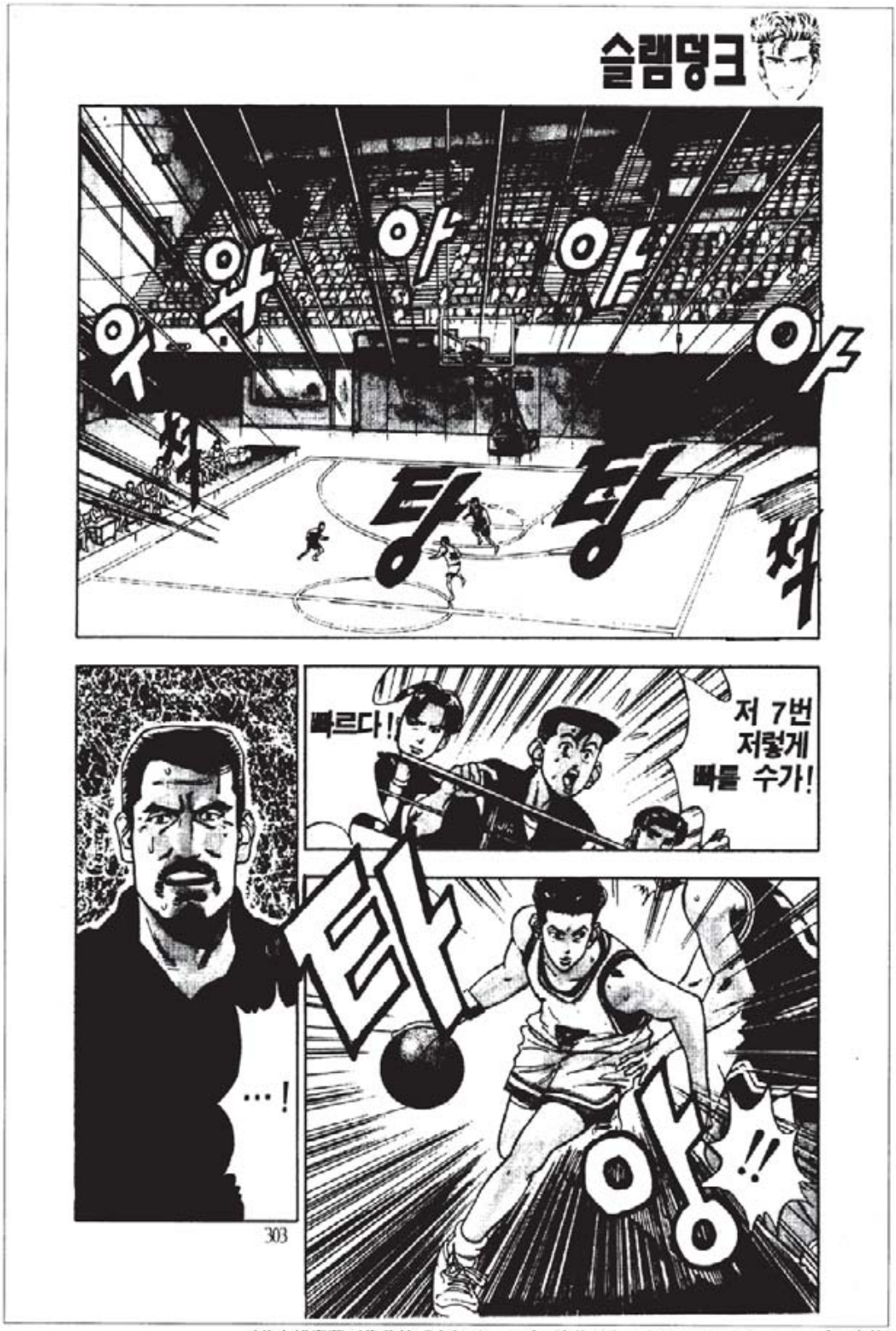
しかし、このような困難な現状を克服し、日本と韓国の子どもや若者が“真のイコールパートナーとして共に生きる世界”を新たに創造するための手掛かりとなる言葉を、韓国でのインタビューの過程で見出すこともできた。それは、私の「なぜ日本でも韓国でも、これほど漫画が子どもや若者に受け入れられるのか」との質問に対して、世界の漫画文化の現状を俯瞰しつつ答えてくれた韓国の漫画雑誌『少年チャンプ』編集部長の黄卿泰（ファン　ギョンテ）氏の次の言葉である。

「漫画には、作者と読者の間に“コンガムデー공감대（共感帯）”があるからです。」

4．新たな“コンガムデー공감대（共感帯）”の創造を

図3は、日本の『少年ジャンプ』（集英社）に連載中の「スラムダンク」のハングル訳の印刷原稿である。黄部長が編集する少年チャンプ編集部でいただいたものである。

図3　韓国の「スラムダンク」



（井上雄彦著／集英社『少年ジャンプ』連載／大元出版『週刊少年チャンプ』連載）

『少年チャンプ』には、「スラムダンク」に加え「ダイの大冒険」が週刊で、「幽遊白書」が月刊で掲載されている。さらにライバル誌である『ＩＱジャンプ』には、「ドラゴンボール」が掲載されている。いずれも、日本で発行部数週600万部を誇る『少年ジャンプ』に連載中の人気漫画である。それが、日本の集英社との正式契約に基づき、日本とほぼリアルタイムでハングルに訳され、韓国の本屋の店頭に並ぶわけである。

漫画雑誌の韓国における発行部数は、私の取材によれば、『少年チャンプ』と『ＩＱジャンプ』を合わせて約50万部ぐらいになるとのこと。ただし、漫画雑誌は、通常、一人で読むのではなく友人の間で回し読まれることが多い。特に一冊1500ウオン（約250円）という値段は、韓国の子どもには高価であるため、回し読まれる率はかなり高いようである。その意味で漫画雑誌の実際の読者数は、発行部数の数倍であると考えられる。

さらに、日本の漫画は週刊誌連載のみでない。日本と同様にアニメもテレビやビデオを通じて見ることができる。また、先に指摘したように、海賊版の単行本が数多く発行されている。私見だが、これらの多様な発行形態をあわせれば、結果的には、日本の漫画は、日本とそれほど変わらない広がりの読者層を韓国に獲得しているとも考えられる。

このように、①日本と韓国の子どもと若者が同じ漫画を、それもリアルタイムで読んでいるという事実。また、②漫画の人気の秘密は作者と読者の間にある“コンガムデー공감대（共感帯）”であるという黄部長の指摘。この二つは、両国の子どもと若者の間に、日本の漫画を媒介に意図せざる過程において、“コンガムデー공감대（共感帯）”の基盤が形成されつつあることを示唆していないだろうか。

他方、あえて言うまでもなく作者と読者は互いに異質な存在である。したがって、“コンガムデー공감대（共感帯）”は、作者と読者が同一の存在になることからではなく、相互に異なる存在であることを認め合いつつ、しかし作品という共通の場において、両者が互いに相互の世界を共有しようとする時に、初めて生じるものと考える。

これが、先に、“コンガムデー공감대（共感帯）”という言葉を、「日本と韓国の子どもや若者が、真のイコールパートナーとして共に生きる世界を新たに創造するための手掛かりとなる言葉」として位置づけた理由である。

思うに、これまで、両国の歴史的事実についての教育のあり方の相違に起因する韓国の人達の日本への“いらだち（非難）”と、日本の人達の韓国への“負い目（無関心）”が相乗的に作用して、両国の教育関係者が、互いの“現状”に“同じ目の高さ”で“知りあい、学びあい、教えあう”機会を見失いがちであったと考える。その結果が、図１と図２の差ではないだろうか。

確かに日本と韓国の間には、今なお様々な問題があり、その解決への責任の多くは日本の側にあることは否定できない。だがそれゆえにこそ、日韓の子どもと若者の間に、互いの異質性を“認め合い、生かし合い、学び合い、教え合える”基盤となる新たな“コンガムデー공감대（共感帯）”を創造する契機を積極的に見出し育むことが最も重要な課題と考える。その確かな手応えが日本と韓国の漫画文化にあることを改めて提起しておきたい。

注　記

1）具体的なことについては、以下の拙稿を参照いただきたい。①「『近くて遠い国』で学んだこと」（『PARTⅡ』№17　連続セミナー授業を創る会）②「“生活者”にとっての“意味”と“思い”からの再構成を」（『教育科学　社会科教育』№358　明治図書）③「国際社会と公民教育」（『公民教育の理論と実践』日本公民教育学会編　第一学習社）④「朝鮮半島を解く迫力あるネタはこれだ」（『教育科学　社会科教育』№372　明治図書）

星空に下校する韓国の高校生

慶熙ホテル経営専門大学・韓国外国語大学講師
夫　伯

1993年２月現在、韓国には1700を超える高校があり、１学年あたり約70万人の高校生が学んでいるが、韓国でも日本同様、否、日本をはるかに上回る受験闘争が繰り広げられている。以下、私が目にし耳にした入試にまつわる韓国の高校教育、及び高校生たちの現状を要略したいと思う。

ハードスケジュールな高校生

韓国の平均的な高校生の履修単位数及び受験科目数は過多きわまりない。この二点が起因して、彼らの生活は至極ハードなものとならざるを得ない。

卒業までに履修されるべき単位数がどれほど「過多」であるかというと、韓国でも文系と理系に分かれるので一定ではないが、その数なんと204～210単位。この数字は日本のそれの約2.5倍に相当している。

この数字に包含された重みをもう少し具体化させてみると、たとえば普通科高校の２年生は１学期間に、以下の表に示したように多くの科目をこなしている。

普通科高校２年生によって１学期間に履修される科目群の一例

共通必須科目	国語、一般数学、英Ⅰ、国史、政経、科学、倫理、音楽、美術、体育、教練、第二外国語、技術、産業、教養選択（哲学、教育学などから１科目選択）、特別活動
文系による選択科目	文学、漢文、作文または文法、数Ⅰ、英Ⅱ、社会科から１科目選択、科学Ⅱ
理系による選択科目	文学、漢文、作文、数Ⅱ、英Ⅱ、物理、化学、生物・地球科学から１科目選択

つまり、１週間に、文系は23、理系は24もの科目を学んでいるのである。

これらの科目はふつう正規の授業時間を通して消化される。そしてさらに、冒頭でも触れた「過」こくなまでに「多」すぎる入試科目の重圧も加算される。したがって、彼らは２年生になると、学生にとってはボーナスともいうべき年間３か月の長期休暇を受験に向けての補習授業という名目の下に半分に減俸され、のみならず、学期中には補習授業は無論のこと、自律学習（日本でいう受験学習のこと。国の義務づけではないが、ほとんどの高校で受験準備を学校で行うことを奨励している）という増税をも被る。

たとえば、普通科高校の２年生の一日は、　　概して下記のようである。

一般的な高校２年生の一日

６：00起床→６：30朝食→７：30学校到着→７：50～８：30朝の補習授業→８：40～８：55朝礼→９：00～16：00（12：30に昼食）、正規の授業→16：00～16：30夕食→16：30～18：30夕方の補習授業→18：30～22：30自律学習→23：15～24：00帰宅・シャワー・軽食→24：30就寝（24：00～２：00勉強＝一流大学志望の生徒の場合）

すなわち、韓国の平均的な高校生たちは２年生になると、一律に受験一本槍体制に突入し、朝早くから弁当を二つもぶら下げて登校し、放課後までほとんどぶっ通しでメニューもりだくさんのカリキュラムの消化に努める。放課後といっても名ばかりのもので、友人と遊びに出ることもなければ、マンガやテレビを見ることもなく、再び補習、さらには自習に勤しみ、10時を過ぎると、ようやく、星空に見守られつつ家路を急ぐのである。

マルチな学力必須の入試制度

それでは、韓国の高校生たちに“学生の本分は勉強である”という文字通りの生活を実践させる入試制度とはいかなるものであろうか。

日本でもかつて国公立大志望の受験生たちから“しんどい”といわれた共通一次が、その科目数の多さを持ってマルチな学力の要求を誇っていたが、韓国の「大学入試学力考査」の科目数はそれ以上に多い。

大学入試学力考査出題科目

文　系	国語、文学、作文、文法、漢文、一般数学、数Ⅰ、英語、国史、社会科から２科目選択、科学、倫理、第二外国語・実業・家庭科から１科目選択、体育（体力測定）
理　系	国語、漢文、一般数学、数Ⅱ、英語、国史、社会科から１科目選択、科学系から３科目選択、倫理、第二外国語・実業・家庭科から１科目選択、体育（体力測定）

したがって、韓国の高校生たちは、以前の日本の国公立大志望者以上にマルチな力を養わなければならない。そのうえ、体力測定で体力まで要求される以上は、楽々と机にばかり向かってもいられないのである。

しかも、韓国の場合は、国立を望むにせよ、私立を志望するにせよ、どこを受けるにしても、４年制をねらう生徒ならば、必ずやこの関門を潜らねばならない。彼らが２年生になると同時に、一丸となって、大学一直線シフトに突入する理由はここにある。

「学力考査」は筆記320点と体力測定20点の計340点満点。筆記科目のうちの７割にマークシート方式が採用されている。ちなみに、今年のソウル大学の受験者のうちの91.8％が300点以上を得点しており、法学部の合格カットラインは326点であった。

精神的支柱は韓国風教育ママ

以上のような、かなり過酷な現状であるにもかかわらず、韓国の高校生たちは実に意欲的である。私（かつてソウルの高校で２年半

日本語を教えていた）の眼から見た限りでは、「毎朝、何種類もの栄養剤を飲んできているのでは？」と首をかしげたくなるほど高校生たちは元気に満ち満ちていた。

では、彼らはなぜこのような苦境にあっても、その意欲を喪失せずにいられるのだろうか。私見ではあるが、私はここに、教育ママならぬ教育オモニ（韓国で母親のことを指す）の役割が大きいと判断している。

韓国にも、学校によく足を運んだり、有名かつ高額の家庭教師をつけたりする、いわゆる教育ママがいる。かつては孟母の三遷に倣って、進学率の高い学区に家ごとに引っ越してしまうという超教育ママが流行したと聞く。ここら辺の状況は日本にも無きにしもあらずと思われるが、ここで、私がまず先に特記しておきたいのは、韓国の教育オモニの我が子への愛情はもっと深く、他に類をみないものではないかということである。

彼女たちにとって我が子のために夜食を作るなどのことは実に当たり前であって、彼女たちはふつう、2時になろうと3時を回ろうと、必ず我が子が床につくのを見届けてから就寝するという。それでいて、朝はしっかり5時には起床し、朝食及び2種類のお弁当を準備してくれるという。またさらに、中間・期末試験の時などには、朝まで一緒に徹夜してくれるともいう。そしてさらに驚かされるのは、我が子にも家庭教師をつけてやろうと、家政婦などの仕事に就いたりするオモニたちが少なくないという事実である。

つまり、韓国の教育オモニたちは、村崎芙容子さん（『カイワレ族の偏差値日記』鎌倉書房の著者）以上に、我が子と受験の苦労を分かち合おうと必死であり、我が子を大学に送るためには、我が身の犠牲すら惜しむことがないのである。

ところで、このオモニたちの世代のほとんどが、「学校教育が個人の社会・経済的な地位を高めてくれる」ことを確信している。培鐘根氏が1987年に行った国民意識調査によると、回答者の60%が以上のように答えており、また、80%が「どのような困難があっても子どもの望む段階まで教育を受けさせる」と言いきっていたそうである。

この数字は、彼女たちの過ごしてきた時代がいかに学歴主義社会の性格を色濃くしていたのかを示唆しており、と同時に、その神話が未だ根強く生きているということを物語っているといえよう。（しかし、実際のところ韓国もすでに学歴社会を迎えているようである。高校卒業生の進学率も、日本の40%を上回り、50%台に突入している。）

オモニたちはこの神話の信仰心から、日夜我が子への献身を惜しまない。また、ことあるごとに、我が子に偉大な神話の説教を繰り返してもいよう。

このようにして韓国の高校生たちは、この教育オモニたちからのメンタルかつボーカルな激励に支えられているがゆえに、過酷な環境にもめげず、すこぶる意欲に燃えているのではないかと思うのである。

新しい入試改革の試み

先に紹介した、韓国の高校生たちに負担どころか、重圧感すら与えてきた「学力考査」の時代も、昨年12月の入試を最後に、その終焉を告げた。

本年度からは“①総合的な思考力の養成、②受験生の負担の軽減”等の方針を掲げる「大学修学能力試験」の時代に入る。

この入試制度は、全受験生が統一して受ける「能力試験」と、各大学にその出題・判定の任された「本考査」の二本立てである。「能力試験」は、言語（国語を中心とした諸般の言語能力を試すことを目的とする）、探求（社会・科学の知識を基本とした思考力を試す問題）、数理（数学）、外国語（英語）と、その名称からして、斬新なイメージを与える4科目。「本考査」は、大学によっては若干異なることもあるが、文系の場合は英・数・国・第二外国語、理系の場合は数・国及び科学系の科目から2科目を選択し、文系、理系ともに4科目を受験する。

ところで、果たしてこの入試改革を契機に、高校生たちはこれまでのような勉強一色の生活から多少なりとも解放されるであろうか。

「負担の軽減」の方針通り、確かに今年からは倫理、体育の2科目が削除されている。しかしながら、英、数、国の3科目については、以前にもまして深い学習が要求されるであろうし、「探求」という科目の性格上、文系・理系の区別なく受験生たちはすべての社会科科目、科学系の科目をマスターしておかなければらないはずである。

このように考えると、今回の入試改革を通して、逆に高校生たちの負担度は高くなりそうな気がしてならない。

韓国の高校生たちがハードスケジュールな毎日を送らなくてはならない理由は、冒頭で触れたように、履修すべき単位数と入試科目数の過多に起因している。したがって、彼らの負担を減らすためには、入試科目の大胆かつ明確な削減がなされるべきであり、さらに、高校教育課程に組み込まれた科目数のより合理的な調整と縮小が求められよう。

この二点が同時に現実化しなければ、おそらく彼らはいつまでも、夕陽ならぬ星空に見守られながら家路を急ぐ毎日を繰り返し続けるに違いなかろう。